藍染を後世に

日下田　正
（株式会社日下田工芸代表取締役）

名月の花かと見えて綿畠　　芭蕉

江戸時代に入って、寒冷地を除いた晩秋の日本中の畑にその光景が見られた。

室町時代、中国大陸を経て綿作が我が国に入って来た事は、現代の我々の想像以上の画期的な出来事だった。それ以前の日本人の労働着・日常着は、麻が大部分であったから。もちろん絹はそれ以前から存在したが、一部の権力者の物であった。麻は気持の良い素材であったが、保温性・保湿性・柔軟性において木綿より劣っている。木綿が日本人の衣生活をどれだけ豊かにしたかは、想像以上のものがあったにちがいない。

その綿作が全国的な広がりを見せた時と期を一にして、その木綿を染めるための藍染屋（紺屋）が日本の至る所に生まれた。江戸中期から後期にかけては、日本人の用いる衣類の80％が藍で染められたと言われている。最も上質な木綿「真岡木綿」が生まれたのもこの時期である。藍染の原料である最も良質な藍玉を生産した阿波藩・二十五万石は、実質内容五十万石以上と言われる程、藍が一国の経済を支える程の存在であった。

日本の藍染の技法は、職人達の努力により江戸の町人文化の華として、「ジャパン・ブルー」「広重ブルー」として、世界中に賞讃される最も繊細な色として完成した。今尚、この時期の染色全般にわたる技法と色は、我々藍染屋の目標でもある。

その隆盛を極めた藍染も明治時代に入って、合成染料の出現や紡績の発達、自動織機の発達などに代表される世界の産業革命の波に洗われ、急速に衰退していった。そのため大正・昭和に入って、多くの藍染業者が廃業に追い込ま

れていった。

「真岡木綿」は、芳賀郡・茨城県下館から筑波下一帯で織られ、真岡に集められて晒され、主に江戸に出荷されて高い評価を得た白木綿である。最盛期には年間38万反も生産された。大消費地江戸には争って各地の木綿が集まって来たはずだが、その中で高級木綿として認められ続けた理由は何だったのか。私は生産地の人達が、他より細い糸を紡ぎ得たからだと思う。短繊維の日本綿を糸車でより細く、より均一に紡ぐ事は相当の修練と集中力が必要である。

結城紬の産地と真岡木綿の産地を円で囲むと、重なる地区がある。結城紬は千年以上の歴史を持つ絹織物で、当然絹であるから細い糸になる。糸という概念を紬糸に置いていた人々は、新しい繊維・木綿を目の前にした時、より細く紡ぐ事に意識を集中したのではないか、私はそう推量する。結果として他の産地より薄手で、織目の詰んだしなやかな高級木綿が生まれたと思う。明治時代に入ると急速に生産量が減少し続け、明治15年の生産を最後に途絶した。

私は昭和14年益子町で紺屋（藍染屋）の長男として生まれた。5才の頃薄暗い風呂場で五衛門風呂に一人で入ると、裏山で「ホー・ホー」と鳴くふくろうが恐くて悲しくて、「生まれてこなければよかった」と泣いた気弱な子供だった。

江戸時代の後期に建てられた鍵屋式住居の1/3以上を占める空間を、むき出しの真っ黒な煤けた梁が支え、72個の藍甕が整然と埋められ、その一画に愛染明王が祀られている染場は、〝甕の上〟と呼ばれ子供心にも神聖な場所と感じられ、立ち入る事がはばかられた。静かな〝甕の上〟で一人の老職人が黙々と糸を染めているのを、時折絞りのリズムをとるために「シュウー・シュウ」と息を吐き出す音を聞きながら眺めているのが好きだった。

終戦の翌年、小学校に入学した。衣料の極端な不足から綿が作られ、女性は家族のために手を動かし機を織った。繊維産業が復興するまでの数年間が日本の綿花栽培の最後となった。現在日本で使われる原綿は、外国からの100%輸入である。この時期、母親の織った布を嫁入りタンスに入れて結婚した女性も多かったはずだ。私の地方で〝地織〟と呼ぶ素材で味わい深い布は、若い娘さんにはあまり好まれなかったようだが、今になってみれば肉親への憶い出につながる大切な品になっているだろう。物の足りない時代だったが、自然は豊かだった。子供達は山野を駆け回り、川遊びに熱中しそれで充分満足だった。

中学時代、自転車で2時間かけて宇都宮へ行き、映画館のはしごをするいっぱしの映画少年だった。2年の時、担任でもあった角海武先生から受けた授業が忘れられない。

歌人斉藤茂吉が死去した翌日の事である。教室に入ってこられ、茂吉の遺影を教卓の上に飾り、何も言葉を発せられなかった。先生の顔は悲しみに満ちており、ざわめいていた教室は静まり返った。十数分の静寂の緊張感に生徒達は耐えた。先生は静かな語り口で茂吉の事を、歌の事を話して下さり、最後に茂吉の歌を朗詠されて授業は終わった。茂吉の歌の響きが心に残った。今も残っている。

高校時代は、「白布が丘ニュース」を作る新聞部員であった。学校の地名である白布が丘は、真岡木綿を晒す所に由来しており、真岡木綿が私の仕事の関心と研究のテーマの対象になるとは、その時思いもしなかった。

高校3年の初夏の夜明け前、暗い部屋にひとり座っていた。無双窓からあかりがさし込み、〝甕の上〟があかるんできた時、私は家業を継ごうと心に決めた。

父と相談し、知人の紹介で東京の織物作家柳悦孝先生に入門を許され、先生の工房に内弟子としてお世話になる事が出来た。先生は当時女子美術大学工芸科の教授をされており、後に学長を務められた。武蔵野の面影の残る林の中の工房で先生の教えを受けた4年間は、私にとって最も緊張し何物にも代え難い時間であった。朝起きて夜布団に入るまで続く緊張感の毎日、そして正座を覚えた。先生が週二回大学へ行く日以外は一緒の生活で、先生の仕事振りを真近に見る事や、工房に訪れて来る人達との会話を身近に聞く事により〝物作り〟としての考え方を学んだ。

また日本民芸館の展示替えの時はお手伝いに行き、そこで柳宗悦先生、浜田庄司先生、当時の民芸運動に携わった先生方に接した事、特にお茶の時間の何げない会話をお聞きする事が出来たのは、私の貴重な体験であった。展示替えの時、収蔵品に直接ふれる事が出来たのも幸せであった。

休日は神田の古本屋街で一日を過ごした。盆・正月の二回帰省する事が楽しみだった。60年安保闘争の時期で、東京が騒然としていた頃である。

四年間の修業を終え、益子へ帰った。父の藍染の手伝いをしながら、織物の仕事の準備を始めた。素材にこだわって行く事を仕事の基本姿勢とし、天然繊維と天然染料のみを使うと決めた。30数年経た現在までそうしてきたつもりである。

仕事の第一歩として「真岡木綿」にも関心があったので、和綿の栽培を試みた。

茶綿は栃木県では種が絶えていたので、鳥取県弓が浜から分けて貰った。海岸の砂地の畑から益子のねばり土への適応が難しく苦労したが、何年後かには秋に透明感のある茶色の綿花を収穫出来た。白・茶二種類の綿はその後も毎

年作り続け、私の木綿の仕事の大切な原材料となっている。

奈良時代、那須野が原で織られ租・庸・調の調布として、奈良朝廷に納められたからむし（苧麻）布が正倉院に所蔵されている。栃木県立那須風土記の丘資料館の展示品として復元の依頼を受け、その準備として、からむしを調べたり、現在唯一栽培されている会津の奥の昭和村を訪ねたり、新潟県十日町の市立博物館の学芸員を訪れたり、越後上布の第一人者にお会いしたりした。また、正倉院に実物の見学の要請をしたが断わられ、その代わりに精密なデータを戴いたり、千三百年繊維を収蔵する事の厳しさを学ぶ事が出来た。私なりに復元出来た事は、現在までの私の仕事の中でも深く印象に残っている。

天然染料は試行錯誤を重ねて来たが、今もって使いこなせない染料もある。科藍をはじめとして、紫根・茜・山桃・蘇枋・コチニール・紅花・矢車・槐・刈安そして桜などに代表される。古来より薬草としても使われて来た。そして日本人の美意識と日本文学に深い関わりを持って来た事も興味深い事である。人力の及ばぬ自然の不思議な力を感じ、尽きせぬ魅力を覚える。

この秋11月23日栃木県総合文化センター第一ギャラリーで開かれた第4回「藍華会染織展」に、それぞれの作品を携えて会員が集まった。意欲的に新しい手法に挑戦する人、頑固にその世界を深める人、子育てに忙しい生活の中で頑張って出品してくる人。

昭和45年頃より藍染・織物の道を求める人達が、我が家の工房に集うようになった。3年間を一応の目安として、染織の基本的技術を習得し、各地でそれぞれの仕事をしている。その人達が約40名程になり、10年前に「藍華会」が生まれた。昨年栃木県で開催された国民文化祭の美術部門工芸の部で、第一席の文部大臣賞・宇都宮市長賞を受賞した人もおり、また東京をはじめとして各地の画廊で個展を開く人も多い。各自が定めた目標に向かってゆっくりと着実に歩いており、父博とともに〝藍染を後世に〟と念願にして来た事が叶いつつある。

数年前、京都国際会議場で世界織物会議が開かれた。そこでハーバード大学の社会学者タマラ教授の基調講演があった。「現在世界的に伝統工芸は非常に厳しい状況下にある。しかし人類は地球的規模の環境破壊の反省から、今後、自然回帰・土に帰ろうとの潮流が起こって来るだろう。伝統工芸の見直される時は必ず来る。」と予測された。

今年3月イギリスの都市バースのホルボーン博物館で、40年来追い求めていたエセル・メーレー（名著「ベジタブル・ダイ」の著者）のホームスパンの作品に出会い圧倒された。

道は、まだまだ遠い。